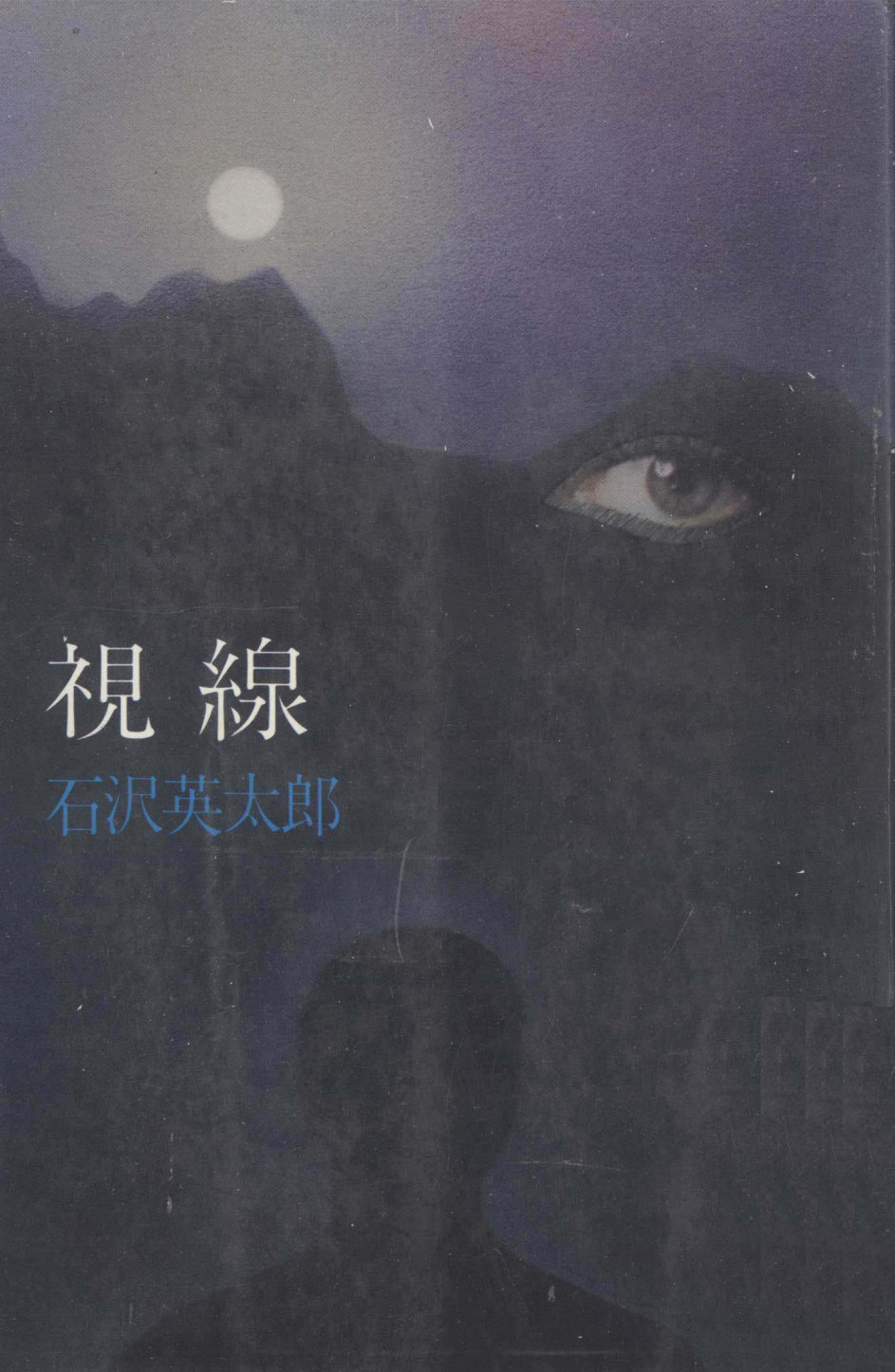




視線

石沢英太郎

視線

石沢英太郎



文藝春秋

石沢英太郎（いしざわ・えいたろう）

1916（大正5）年満洲大連に生まれる。大連商業卒。満洲電業に勤務、戦後、九州経済調査協会に勤務。66年「羊歯行」で第1回双葉推理賞を受賞。77年「視線」で第30回日本推理作家協会賞を受賞。著書に「唐三彩の謎」「やきもの推理行」「ブルー・フィルム殺人事件」などがある。

視線
しせん

昭和五十二年九月二十五日 第一刷

定価 八八〇円

著者 石沢英太郎

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五・二二一

印刷 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

© Eitaro Ishizawa 1977

Printed in Japan

視線／目次

視線

その犬の名はリリー

五十五歳の生理

アドニスの花

ガラスの家

一本の藁

ある完全犯罪

5

33

63

103

139

179

221

視線

A・D 装幀
川上 哲夫
川上 稔

視線

I

不況下の二月の風は冷たい。

そういえば、歩いている人たちも、どこかウソ寒い表情だった。不況の深刻化と物価の値上りが人々の心まで冷えこまずようだ。

しかし先を急いでいるかのような人たちが、この神社の前にさしかかると、一斉に視線を神社の車寄せに走らせていた。なかには立ち止まる人もある。

この神社はこの小さな地方都市で縁結びの神として有名である。

ちょうど神前の結婚式が済んだらしく、礼服の人々にかこまれて、新郎、新婦が車寄せに出て、車を待っているところだった。多分これから結婚披露宴に向かうのだろう。

花嫁姿は、寒い浮世の風を一瞬忘れさせ、心を明かるくさせるものがある。

角かくしに華麗な花嫁衣裳、介添役の紋服姿の老婦人に軽く手をあずけ、スラッとした上背の新婦が立っていた。

通行人の好奇の眼はまず新婦にそそがれていた。こういったとき、視線の集まるのは、やはり花嫁である。

ちょうど通りかかった梶原刑事も、このあでやかな光景に足をとどめたひとりだった。

「おい」

と低い声でベアの若い柴田刑事に眼で知らせた。他意はなかった。聞き込みが済んでの帰り途という気の軽さもあつたし、それより傍にいる柴田は、この秋には梶原の姪と結婚することになっている。

二人は通行人の弥次馬と同じように、花嫁に眼をそそいだ。

花嫁姿を見るのはいつもいい感じだ。梶原のように五十歳の年齢になっても、いやその年齢だからこそ、この眺めは心に甘美なうずきが湧いてくる。挙式を秋に控えた柴田にはなお刺戟的な光景であらう、と梶原は思った。

新婦はきわだった美貌だった。花嫁の濃い化粧は地の顔を消すのだが、この花嫁の肌の白さと大きい黒い瞳はその化粧に負けない天性の美しさを示している。

へこういう美人を妻にする果報者は……

と梶原の眼は隣りの新郎に移った。へあつと思つた。記憶にも新しい顔がそこにあつた。つい六カ月前、当の梶原が犯人逮捕の殊勲をたてた、この街の銀行強盗事件のとき、最初にホールドアップを食った男である。名前もよく覚えてゐる。たしか、へ有川透ありがわ とろという銀行員である。

へあの有川が結婚か

と、梶原には多少の感慨があつた。事件が梶原の犯人逮捕で落着いたあとも、梶原の心の中で、この有川という銀行員は、なにか、ひつかかるものを残していた。それはただ、この有川が、あの瞬間、視線を隣りの席の男に走らせたという、ただそれだけのことだったが……。

そのとき、傍の柴田が、

「あっ」

という小さな声を出した。思わず梶原は、柴田を見た。柴田の視線は、花嫁にそそがれていた。「どうも見覚えが……」

と柴田はいった。

「どこで？ いつ？」

と梶原が訊いたとき、神社の車寄せに、ピカピカ光った、黒の大型車二台がすべるように横づけになった。

新郎・新婦、介添人がそれぞれの車に乗りこんだ。そしてその車は、街角へと消えていった。梶原と柴田は歩き出した。

「さっき見覚えがあるといったのは花嫁の方かい？」

梶原は訊いた。なにか気になったのである。

「はい」

と柴田はいった。

「職務上のことですかい？」

「ええ、そうです。それがどうも思い出せないんで……。花嫁となると厚化粧をするでしょう。しかし、あの大きな眼にかすかな記憶があるんです」

と柴田はいった。

姪の夫と白羽の矢をたてたこの優秀な警官も、仕事のこととなると、まだ若いな、と梶原は思った。刑事にとっては、職務上一度会った人の顔を記憶するのもひとつの重要なことである。

「きょうの花婿の方ね」

と梶原はいった。「あの男は、ほら、T相互の銀行強盗のとき、拳銃を突きつけられ、札束を奪われた有川という男だよ」

「へえ、主任が手柄を立てたあの事件のときの……」

柴田は眼を円くしていった。柴田が梶原のいる捜査一課に転属したのは、五カ月前である。この銀行強盗事件のとき、彼は市の東部の派出所勤務だった。

「いや手柄というほどではなかったが……」

と梶原は謙遜していった。

「手柄ですよ」

と若い柴田は強調した。「だって主任が犯人を逮捕したから警察の威光が上ったでしよう」

大学出だけあって、柴田は、『威光が上った』というようなむずかしい表現をする、と梶原は苦笑した。しかし、手柄は手柄だったろう。

この犯人逮捕で、県警本部長の賞状をもらっている。

「君、さっき花嫁に見覚えがある、といったらう？」

「はい」

「もし、思い出したら、僕に知らせてくれないか」

と梶原はいった。

「はい」

素直に柴田はうなずいた。

「へそれにしても」

有川のあの視線への疑惑がまだ心の中に残っている。

疑惑といつても、有川行員があゝ銀行強盗の犯人にかかわりがあるとか、そういった問題ではない。

むしろ、警察捜査の限界を超えた問題であった。

無意識の行為で、人が死んだ場合、それは罪に値するか、という微妙な心理的な問題だった。前にこのことを梶原は深く考え、そして最後に放棄したのだった。きょう有川透の花婿姿を見て、ふたたびその疑惑がぶり返してくるのを感じた。

2

非番の日の夜であった。

梶原はテレビの刑事もののスイッチを切って寝ころんだ。現職の警察官にとって、近ごろ評判の刑事ものは、面白いことは面白いが白々しさが目立つ。

妻は長女のお産で産院に行っているし、同居の姪の節子は、柴田と一緒に音楽会に出掛け、梶原ひとりの留守番だった。婚約中の交際は順調のようである。デートで帰ってきたときの節子の表情でそれは分かる。

「警察官はいやよ」

といっていた節子が、柴田と交際し始めてから、変わったようである。傍から見ても二人は幸福そうであった。これは梶原にとってもうれしいことだった。

無聊に堪えかねて、梶原は柴田が残していった二、三冊の本に手を出した。

「置いてゆけよ。音楽会に受験勉強の本は野暮ってものだろう。帰りに寄って持って帰ったらいじやないか」

と、梶原が柴田に言い、無理に置かした本だった。柴田はこの夏、警部補昇任試験を受験することになっている。七人に一人のむずかしい合格率である。だから勤務外ときは、片時も受験勉強の本を離さない。

『『警察官実務提要』か』

と、採りあげた本の表題を見て梶原は呟いた。にがい思い出がある。三十半ばまでは梶原も警部補試験に挑戦したものだ。しかし、三度も筆記試験に落ちて断念した。だからいまでも職名は巡査部長である。警察官の立身出世は試験を突破しなければならぬ。

巡査部長、警部補、警部、と、すべて試験で昇任する。

試験に弱い梶原は、いまでは巡査部長の万年刑事とあきらめている。しかし、十数年前までは、この『警察官実務提要』に齧りついていた。

『提要』を開いてみる。

へ法律文となるとどうしてこんなにむずかしい表現になるのだろう

一昔前暗記に骨折った条文が細い活字で、ぎっしり詰まっている。バラバラとめくると、

『外勤警察官勤務要則』

の第二五条へ警らゝの条項があった。

『受持勤務員は、警らに際しては、周密鋭敏な観察力及び注意力を発揮し、職務質問を励行し、異常又は不審と認められる事象の発見及びその真相の究明につとめ……』

とまで眼を走らせた梶原は、ページを閉じた。

どうもやはり苦手だった。現場での警ら、すなわちパトロールでは、他の誰にも負けない自信はあるのだが……。

もう一冊の本を梶原は手にとった。昇任試験用の受験雑誌だ。これは法文で埋まっている『提要』よりはやさしい。第一雑誌名からが『警官・受験の友』である。

目次を開いてみる。

と、『視線の業務』というエッセイの表現が眼に止まった。『視線……』という表現に魅^ひかれて梶原は読む気になった。

おととい、結婚式の花嫁・花婿をみてから梶原は『視線』に拘^{こだわ}っていたのである。

筆者は、著名な産業心理学者のT氏であった。マスコミに活躍しているT氏だけに表現は、分^わかりやすく書いてある。

『……もともと、下世話に、“眼は口ほどにものをいい”、“お女郎^{じやうろう}は口で殺さず眼で殺し”といわれるほど、人間にとって“視線”は微妙なものである。演劇や映画でも“眼技”といわれるほど視線のありようは重くみられる。

ところで、近代的職業においても、ただ見るだけが仕事という分野も増えてきている。

たとえば、変電所や原子力発電所のメーター監視員などもそうである。ジッとメーターをにらんで異常があるかないかを監視して、一日中ずっと仕事である。退屈な仕事で、しかも一瞬のサボタージュが大きな事故につながるので、緊張を要する仕事である。したがって疲れやすい。それで産業能率の立場からは、こういった業務を“継続断間業務”と呼んで、待機中の賃金も支払うようになっている。

警官のバトロールも、これに類する。眼を働かして、挙動不審の者はいないか、煙を出している家屋はないか、立小便をしている男はいないかまで注意を働かせなければならない。“視線の業務”である。

広く考えると現代の仕事はほとんど『視線の業務』にかかわりがある。ことに文化関係の仕事はそうだ。新聞・テレビ・映画などすべて『視線』なくしてはなりたない。

卑近な話が、旅館やラブホテルの案内人は、一べつして客の懐具合を読みとるという。これも『視線の業務』というべきか……』

というような内容であった。

へなるほど」こういう見方があるのだな、と梶原は感心した。

が、このエッセイの中の、

『口で殺さず、眼で殺し』

という言葉を反芻したとき、またあの疑惑がよみがえってきた。

へあの有川透の、あの瞬間の視線に、他意はなかったろうか」

の疑惑であり、それはさらに、

へあの有川の視線に殺意はなかったのだろうか」

に深まるそれは疑惑だった。

梶原の記憶は、銀行強盗事件に、急速にさかのぼっていった。

3

事件は九月三日、午後三時十五分過ぎに起こった。

この街のT相互銀行N支店では、午後三時に表入口のシャッターは下ろされた。

しかし、銀行内には、まだ客の姿が二、三人は見受けられ、三時以後も入ってくる客がいた。

ギリギリの預金の客のために、裏口から入れるよう便宜をはかっているからだ。どこの銀行でも